第1部　各地域における東日本大震災
B　宮古地域
第5章　藤原・磯鶏地区

谷部真吾

はじめに　――藤原・磯鶏地区の被災概要――

平成23（2011）年3月11日14時46分に発生した東日本大震災と、その後の津波によって藤原・磯鶏地区がこうむった被害について、『東日本大震災　宮古市の記録』第1巻（津波史編）によると、津波は中屋造船所前の水門を破り、また藤原埠頭の防潮堤を乗り越えて藤原地区に流れ込み、国道45号線を越えJR山田線の線路にまで達したという（2014年：67頁）。被害は45号線周辺から海側の地域で大きかったが、それだけにとどまらず、藤原小学校の校庭も浸水した。一方、磯鶏地区では、埠頭にある工場や施設はもちろん、国道45号線沿いに大きな被害が出た。津波は、JR磯鶏駅を越えて磯鶏西や上村までおよび、八木沢川沿いの工場、岩手県立宮古水産高校も浸水した。さらに、当年（平成23年）開催予定であったインターハイで、ヨット競技の会場となるはずであったリアスハーバーも全壊し、加えて近くの貯木場から木材（丸太）が流失した。このような地震・津波によって、藤原地区で6名、磯鶏地区（神林地区を含む）で12名の尊い命が失われた（同：133頁）。

1　被災の記憶

(1)　避難の様子

海に面した藤原・磯鶏地区では、上述のような被害をこうむったため、多くの人が避難を経験している。今回の調査で話を聞くことのできた23人の避難行動を振り返ってみると、大きく2つに分けることができる。一つは、地震直後に津波を連想し、すぐに避難したケースであり、もう一つは、地震発生後、しばらくしてから避難を開始したケースである。後者の中には、海の状況を確認してから、もしくは津波を目撃してから避難したという人も含まれる。このうち、すぐに避難を開始した人は全体の26％であり、半数以上の人々がしばらくしてからの避難（52％）、とりわけ海の状態を確認してから避難した人も全体の30％いた（残り22％は不明もしくは避難せず）。ここでは、藤原・磯鶏地区の人々が避難するまでの様子を、彼らの語りを通して見てみたい。

古舘善一さん（昭和6年生）・**篤子さん**（昭和11年生）夫婦の場合

藤原で海産物加工業、古須賀商店を経営する古舘さん夫婦は、3月11日の午後、自宅兼加工場にて従業員とともに明日出荷する商品の準備に追われていた。地震が襲ったのは、そのときである。電柱が倒れるかと思うくらいの揺れだった。その場にいた全員が立っていられず、地べたに座りこんだ。古舘善一さんは、すぐに津波がくると思い、従業員に避難を命じ、自分たちも身支度を整え避難することにした。このとき、古舘さんの脳裏に、奥尻島での津波（平成5年に発生した北海道南西沖地震にともなう津波）の際に車が波にのまれたシーンが思い浮かんだため、従業員に車をおいて逃げるよう指示をした。古舘さんたちが目指した避難所は宮古市立藤原小学校であった。加工場から学校までは、そう遠くないため、地震発生から10分程度で避難所附近に到着したのではないかと語る。だが、すぐには小学校に入らず、しばらくはJR山田線と藤原小学校の間にあるラサ工業所有の広場にいた。一緒に逃げてきた従業員のことが気になり、彼ら全員の帰宅を見届けたいと思ったからである。夫婦が小学校の体育館に入ったのは17時前であった（平成27年4月25日聞き取り）。

中居信夫さん（昭和12年生）の場合

藤原で漁師をしている中居さんは、3月11日の昼過ぎ、自宅にいて地震に見舞われた。その後、防災無線から「3㍍の津波がくる」という放送を聞いた。しばらくすると今度は「6㍍の津波がくる」といい始めた。この放送と同時に家の中の電気が消えた。今回の地震で家は大きく揺れたが、つぶれることはなかった。だが、その後も余震が続き、

茶わんなどが落ちてくるため、「これではダメだ」と思い避難することにした。ガス栓を閉め、電気のブレーカーを落とし、準備していたナップサックを背負った。これは、3月11日以前に小さな地震がいくつか起きていたため、いつか大きな地震がくるのではないかと思い、すぐに逃げられるよう用意していたものである。中には印鑑などを入れておいた。中居さんは一旦家の外に出るも、妻の位牌を取りに戻り、再度家を出た。そのとき、家のそばの防潮堤の上に5～6人の人影が見えた。彼らが突然あわてはじめたので、「何があったの?」と声をかけたところ、「大きなのがきたから逃げなさい!」といわれた。中居さんは、避難する際、隣の老夫婦にも「逃げなさい」と声をかけた。また、避難の最中、近所の人から「大きな地震だったね」と話しかけられたので、「その格好では逃げられないよ」と返したところ、「津波がくるのか」と質問されたという。今回の地震の後に、津波がくることを想定した人ばかりでなかったことを、こうした話からもうかがい知ることができる。

中居さんが目指した避難先は、現在、藤原の仮設住宅が建っている高台であった。途中、山田線の線路のあたりで後ろを振り返ると、森林管理署の宿舎のそばにある大きな水門の上を、波が越えていくのが見えた。さらに山田線の線路を越え、かつてラサ工業への引き込み線があったところ（現在の藤原仮設住宅が建つあたり）まで上り、再度海の方を見ると、津波が観音堂の墓を次々となぎ倒していた。しばらくそこで津波の様子を眺めていると、足元にある山田線のトンネルから妙な音が聞こえてきた。音はだんだん大きくなり、やがて黒い水が流れてきた。磯鶏方面を襲った津波が、トンネル伝いに藤原に流れ込んできたのであった（写真1）。中居さんに限らず、磯鶏方面を襲った津波が、その後、藤原にも流れ込んできたという話は他の複数の話者からも聞いた。津波は山田線のトンネルのみならず、国道45号線を流れてきたともいう。藤原は、確かに磯鶏より低いところに集落が広がっているため、水が流れてきたのであろう。

写真1　山田線トンネル

避難場所で水が引くのを待っていたとき、中居さんはある人に「比古神社に行った方がいい」といわれた。しかし、比古神社の建つ場所はかつての石切り場であり、神社自体は岩盤の上に立っているが社務所は盛り土された土地の上に建てられているため、大勢で行くと崩れる危険性があると思い、比古神社に行かなかった。やがて、水が引いてから自宅を見に行くと、家は流されてしまって何もなかった。そのため、河南に住む兄の下で避難生活を送ることにした（平成27年9月12日聞き取り）。

近江勇さん（昭和33年生）の場合

近江さんは、「ホテル近江屋」の代表取締役社長である。3月11日の午後、ホテルで国会中継を見ながら、客と宴会の打ち合わせをしていた。そのときテレビで地震警報が流れた。「地震ですね」と客と話した直後に、大きな揺れを感じた。ただごとではなかったため客と逃げようとしたが、ホテルの出入り口も大きく揺れ、歩くのも大変だった。この地震により、ほとんどの客が帰った。唯一の滞在予定客にも避難を勧め、一緒に外に出た。従業員は、このとき当日の宴会の準備をしていたが、外に避難させた。従業員の避難には予想以上に時間がかかり、全員が避難するまでに20～30分近くかかってしまった。

その間、防災無線では津波警報を報じていた。津波の高さは最初3㍍といっていたが、徐々に高くなり、6㍍、10㍍となった。津波の高さが10㍍と聞いたとき、にわかには信じられなかった。そこで、ホテルの外階段を上って海を見てみると、沖防波堤のあたりの水の量が明らかに増えていたのが確認できた。「これはまずい」と思い、避難する

ことにした。従業員は自分の車もしくはホテルのワゴン車に乗って避難し、近江さんも自分の車に乗り、宮古市立磯鶏小学校に避難した。小学校手前の陸橋に車を止めて、海を見ようと振り返ると、波が足元近くまできていた。避難している最中、波に追われた覚えはないが、間一髪であった。ホテル近江屋の、今回の地震・津波による人的被害は、従業員・客ともにゼロであった（平成27年3月13日聞き取り）。

以上、3人の避難の様子について見てきた。津波がくることを想定し、すぐに避難を開始した古舘さん夫妻と、津波を想定したかどうかは定かでないが、比較的早くに避難した中居さんは、余裕をもって逃げることができた。それに対して、近江さんは海の状態を確認してからの避難であったために、危なかったといえる。『東日本大震災　宮古市の記録』第1巻（津波史編）によると、宮古市を襲った津波の第1波は15時1分に到達し、15時26分には8・5㍍以上の波の高さを記録している（但し、検潮所が流失したため不正確な記録の可能性がある）（2014年:59頁）。このようなデータからしても、近江さんの避難は、まさしく「間一髪」であった。

(2) 特筆すべき避難の語り

そうした点を敷衍すれば、避難とは生死を分ける行動であるといえる。そのため、この種の話を記録にとどめることは、後日のためになるであろう。ここでは、さらに5人の避難にまつわるエピソードを記しておく。

佐々木トシさん（昭和12年生）の場合

地震発生時、佐々木さんは、石崎の自宅にてミシンを使った仕事をしていた。大きな揺れであったため「これはダメだ」と思い、仕事の関係で広げていた布などを押し入れにしまっていたところ、2回目の地震（余震）がきた。佐々木さんは、ますます「これはダメだ」という思いを強くし、避難に向けて食糧をリュックに詰めようと冷蔵庫を開けた。すると冷蔵庫の電気がつかなかった。この時点で、すでに停電していたようである。佐々木さんは、冷蔵庫の中にあったものをリュックに詰めて、そのまま避難した。途中、ある家の奥さんが「どうなるんでしょうかね？」といいながら家から出てきたので、佐々木さんは「逃げれんすべす！」と走りながら答えた。そうこうしているうちに、すぐそこまで波が迫ってきた。波に追いかけられるように逃げたという。

JR山田線にかかる陸橋のところで、ここまでくれば大丈夫だろうと思い、一休みした。その場所で、津波が多くの車や材木を飲み込みながら線路を越えていくのを見ていた。30分くらい休んでいただろうか。そのとき、先程声をかけてきた奥さんが波にのまれてしまい、ガードレールと海から流れてきたタイヤとの間にはさまれて止まった。近くで、その光景を見ていた数人の男性が駆け寄って、奥さんを助け出した。男性たちは、どこからもってきたのか、板状のものの上に奥さんを寝かせ、トンネルそばの家に運び込んだ。幸いなことに、たまたま運び込んだその家に看護師が3～4人いたため、手当てしてもらえた。

その後、佐々木さんは磯鶏小学校を目指して、避難を再開した。しかし、山本商店のあたりは、水がたまっていて通れなかった。そのため、山すそを歩いて磯鶏小学校まで向かった。当然、そこに道などなく、民家と山との間を歩いて行った。ここを歩いた人は佐々木さんの他にも数人いた。小学校にたどり着いたのは、日も暮れた17時ごろだった。

今回の東日本大震災の被害状況を知るにおよんで、災害発生時にどこに避難すべきか、改めて考えた人もいることであろう。その際、避難経路として、避難所までの最短ルートを想定している場合が多いのではないだろうか。しかし、そこが通れなくなってしまうこともあることを、佐々木さんの語りは示している。自らの体力・状況なども勘案して、避難経路は何本か考えておく必要があるといえる（平成27年9月11日聞き取り）。

澤口功さん（昭和25年生）の場合

ビデオショップ澤口を経営し、ＩＡＴ（岩手朝日テレビ）の宮古支局員でもある澤口さんは、地震の際、末広町にあった店舗にいた。地震直後、ＩＡＴから電話があり、報道用の映像を撮影することになった。澤口さんは急いで市役所に向かった。15時ごろ、市役所の階段から宮古大橋方面を見ると、海に変化はなく国道も渋滞していなかった。但し、信号機はついていなかった。その後、澤口さんは車で自宅に向かった。自宅近くまでくると、水門から波が入ってきているのが見えたので、その様子を撮影した。自宅には寝たきりの母親と看病の姉がいたため、避難を促そうと家の方に体を向けたところ、自宅の後ろに30㍍ほどの高さの真っ黒な波が上がった。波は、次の瞬間、澤口さんの自宅の屋根の上に落ちた。その直後、自身も波にのまれた。強い衝撃を受け、体が反り返った。津波は、そのまま澤口さんの体を押し流したが、国道45号線の手前にある電柱にぶつかり、波からはじき出された。これによって、一命を取り留めたのではないかと澤口さんはいう。但し、このとき腰に強烈な痛みを感じた。後日わかったことであるが、脊髄の神経が切れかかっていた。腰の痛みに耐えながら、澤口さんは上村にある妻の実家に向かい、妻と再開した。妻の実家は、幸いにも津波の被害を免れたため、しばらくそこで暮らすことにした。一方、自宅で津波の直撃を受けた母親と姉は、後日、遺体で発見された。

上述したように、公式記録によると、宮古市を襲った津波は15時26分に8・5㍍以上の波の高さを記録していた（宮古市東日本大震災記録編集委員会（編）２０１４年：59頁）。但し、局所的には、これ以上の高さの波が押し寄せていたことが澤口さんの語りからわかる。また、自然災害は、個々の家庭の事情を考慮することはない。当たり前のことであるが、この厳しい現実を十分理解しておく必要があるように思われる（平成27年４月27日聞き取り）。

小野寺俊雄さん（昭和20年生）の場合

藤原で化粧品店を経営する小野寺さんは、消防団第四分団の団員でもある。地震があったとき、小野寺さんは自宅兼店舗にいた。この地震は異常であり、特別に大きいと思った。これまで経験した地震とはまったく違っていたので、すぐさま文献で読んで知っていた貞観地震（８６９年）のことが頭に浮かんだ。このため、従業員に店を閉めて家に帰るよう指示し、また家族にも避難するようにいった。その後、小野寺さんは、断水を警戒してやかん２つに水を入れ、消防団の屯所の２階にあげてから、水門を閉めにいった。地震が発生してから、すべての水門を閉め終わるまでに要した時間は、12～13分くらいだった。

水門を閉め終えて屯所近くに戻ってくるも、津波のくる気配はまったくなかった。ラジオをもっていなかったこともあり、ポンプ車のそばにいればカーラジオを通じて現在の状況を知ることができたが、そこを離れてしまうとまったくわからなくなる。防災無線は、津波がくることを繰り返し伝えていたが、いつくるのか、現状がどうなっているのかを知ることはできなかった。そこで携帯ラジオを取りに一旦自宅に戻った。新しい電池に入れ替えて、再び屯所に向かって歩き出したところで津波に襲われた。あわてて屯所の２階に駆け上がり、そこから消防ホースを乾かすための乾燥塔の上まで登った（写真２）。ふと、目の前の歩道橋に目をやると、３人くらいの高校生がいた。彼らも、国道を歩いているときに津波に襲われ、あわてて歩道橋に上ったのであろう。水が引くまで、彼らもそこで耐えざるを得なかった。もちろん小野寺さんも、水が引くまで乾燥塔の上にいた。津波で流されてきた車が当たると大きく揺れたが、不思議と怖さは感じなかった。

写真２　第四分団屯所

小野寺さんは、尋常ではない揺れであったために貞観地震を想起し、従業員と家族を避難させたものの、自身はあやうく津波に襲われかけた。そのとき、小

野寺さんが急いで向かった先も、乾燥塔という少々心許ない避難先であった。いつかくる、そのときのために備えをしておき、いざというときにはすぐに避難する。この原則に忠実な行動こそ、もっとも重要なことであり、まだ大丈夫かもしれないという思いは避難すべきタイミングを逃すことになる。そのことを、小野寺さんの話は示唆しているように思われる（平成27年3月14日聞き取り）。

澤口則夫さん（昭和46年生）の場合

消防団第十分団員でもある澤口さんは、磯鶏で遊漁船業を営んでいる。平成23年3月11日は、めずらしく客のいない日であった。そのため、所有していた4艘の船のうち2艘を陸にあげてから、遅い昼食をとりに近所のラーメン屋に入った。大きな揺れを感じたのはそのときだった。澤口さんはすぐさま水門を閉めに向かった。2つの水門を閉めたが、まだ分団員がそろわなかったため、もう1つ閉めに向かった。そうしているうちに、4人の分団員が集まってきた。そのうちの1人から、「ラジオで釜石に9㍍の津波が到達したといっていた」と聞いた。9㍍の津波だと防潮堤を越える恐れがある。そう判断した澤口さんは、「逃げろ！」と叫びながら防潮堤のそばを走り回った。地震後に海を見にやってくる人がいたからである。

その後、澤口さんは、自身の所有する「第一ゆたか丸」に乗って海上に避難した（写真3）。この船は、エンジンを船外に取り付けるタイプであったため、水深50㌢でもスクリューを回すことができた。澤口さんが船に乗り込んだときの水深は60～70㌢程度であったという。ちなみに、筆者が平成27（2015）年4月28日の午後に、澤口さんが避難のために船に乗った港の水深を確認したところ、目算で2㍍くらいであった。当時、いかに潮が引いていたのか、理解できよう。港から船を出してすぐのところで、1つ目の津波に遭遇した。波が高く盛り上がっており、その波に全速力で上って行った。船の出力がないと、津波を乗り越えるのも容易ではないという。実際、津波を乗り越えることができず、前に進むのに苦労していた船があったようである。藤原埠頭のあたりで、2つ目の津波に遭遇した。宮古湾の水深は、重茂半島側が深く、宮古側で浅くなっている。そうしたこともあり、津波の速度も重茂半島側で速く、宮古側で遅かった。3つ目の津波を乗り越えたとき、津軽石方面を振り返ると、いつもと違う眺めであった。やはり、波の高さはかなりのものであったのであろう。いくつかの津波を乗り越えながら宮古湾を航行している際に、津波が重茂半島の海岸沿いに建てられた家を押しつぶすのを見た。また、蛸の浜を津波が乗り越えていくのも目の当たりにした。宮古湾を出ると、ある程度、沖へ向かった。海上は暗く、雪が降っていた。雪が止んでから田老方面を見ると、妙に明るかった。山火事である。夜になると（20時ごろか？）がれきが流れてきたので、さらに沖へ向かった。海は重油のにおいがひどく、また丸々一軒の家が流されてきた。その夜、家族とはメールで連絡がとれた。

12日の朝、宮古湾に入れるか見に行ってみたが、がれきで入れなかった。大量のがれきが広がる光景を見て、復興は難しいのではないかと思ったという。この日も海が動いていて、津波のような状態であった。正午ごろ、自衛隊の護衛艦が宮古沖にやってきた。漁業無線で食事がもらえると聞いたので護衛艦に向かい、おにぎり2個と缶詰をもらった。13日の朝になって、ようやく藤原埠頭に船を入れることができた。船を下りて、磯鶏の自宅まで歩いた。家の近くまでくると、屋根が見えたので家は無事だと思ったが、1階部分に大きな穴が開いていた。丸太が30本くらい刺さっていた。

写真3　第一ゆたか丸

澤口さんによると、漁師は津波がきたら船に乗って沖に避難するのが当たり前であるという。しか

し、そうした行動は、一般の人々にはほとんど知られていないのではないだろうか。その意味で、澤口さんの語りは、きわめて貴重であるといえる（平成27年4月28日聞き取り）。

長崎からやってきた高校生の場合

先に、自然災害は個々の家庭の事情を考慮することはないと指摘したが、それは個人に関しても同じである。ホテル近江屋社長の近江勇さんから、次のような話を聞いた。

平成23年3月11日14時30分過ぎ、ホテル近江屋前のバス停で、1人の男子高校生がバスから降りた。彼は、翌日に迫った国立宮古海上技術短期大学校の受験に備えて、長崎からやってきたのである。その日の夜は、ホテル近江屋に宿泊することになっていた。彼がバスを降りてホテルに入ろうとしたとき、地震が発生した。ホテル近江屋の避難状況についてはすでに記したが、彼もホテルのワゴン車に乗せられて、磯鶏小学校に避難した。今回の津波によって、JR山田線をはじめとする公共交通がストップしたため、長崎の実家に帰る手段を失った男子高校生は、そのまま避難生活を余儀なくされ、1週間ほど近江さんとともに車の中で寝起きした。やがて、近江さんは、磯鶏小学校に取材にきていた新聞記者の中に本来は佐賀支局の人がおり、その人が明日佐賀に帰るという情報を聞きつけた。そこで、その記者に事情を話し、高校生を一緒に九州まで連れて行ってくれないかと頼んでみたところ、了解を得ることができた。これによって、彼はようやく帰宅することができた。しばらくして、彼からカップラーメンが2箱ほど送られてきた。

この話は2つのことを示唆している。1つは、私たちも旅行先で被災する可能性があること、もう1つは、観光地の諸機関においては、旅行者の避難をどうするのか、十分検討する必要があることである。特に、後者に関して、例えば万一に備えてガイドブックに避難先や避難経路を掲載しておくというのは、やり過ぎであろうか（平成27年3月13日聞き取り）。

2　被災後の暮らし

以上、地震発生から避難までの様子を、人々の語りを中心に見てきた。藤原・磯鶏地区は海に面した集落なので、津波から逃れるため自宅を離れて避難する人も多かった。彼らの中には、水が引いた後、自宅に戻ったり親類や知人の家に向かったりする人もいた。他方、避難所でその夜を明かす人も多くいた。そこで次に、避難してからの人々の生活、とりわけ比古神社、藤原小学校、磯鶏小学校での避難生活について、同じく住民の語りを通して見てみたい。

(1)　藤原比古神社にて

飛澤寿男さん（昭和22年生）は、地震発生時、母親と娘、娘の2人の子どもたちと一緒に自宅にいた。大きな地震であったため津波がくるだろうと思い、すぐに避難することにした。10分くらいで身支度を整え、家の外に出たところで、妻が仕事から帰ってきた。そこで、妻も含めて比古神社に避難した。比古神社では社務所が開けられていた。しかし、避難者全員を収容することはできず、社務所に入れなかった人たちは境内でたき火をして暖をとった（写真4）。この日は雪が降っていたため、とても寒かった。社務所の中も隙間風が入り込み寒かった。しかも余震が続いており、眠れるような状態ではなかった。社務所では、多くの人が座ったまま夜を明かした。この日、比古神社で夜を明かした人は、境内を含めると200人くらいいたのではないかと飛澤さんはいう。とにかく人でいっぱいであった。比古神社で過ごした3月11日の夜、食べ物を分けあって食べた記憶がある。誰かがもってきたのか、差し入れがあったのかもしれない。あるいは、比古神社のことは消防団の人がいろいろとやっていたので、その人が手配したのかもしれない。水は、比古神社の境内に沢水があるので、それを使った。こうして比古神社で1晩過ごし、翌日から藤原小学校へ移っていった。飛澤さんは藤原2丁目の自治会長をしていたこともあり、避難所の世話をしなければならないと考えていた。上述の通り、比古神社に関しては消防団の人が世話をしていたので、ここは彼に任せ、自身は藤原小学

校へと向かった（平成27年4月29日聞き取り）。

比古神社の世話をしていたのは、第四分団の副団長で、藤原2丁目で精肉店を営んでいた**松崎義男さん**（昭和20年生）である。松崎さんの自宅は、国道45号線に面していたこともあり、水に浸かった。しかし、2階は無事であったため、そこで寝起きすることもできた。それでも松崎さんは、これまで消防団員として活動してきたことから、地域の惨状を放っておけず、2～3日は比古神社に泊まり、その後は自宅から通いながら避難者の世話をした。

松崎さんも、津波発生時、比古神社に避難していた。その後、この日の夜の食事を何とかしなければと思い、自宅にあった商品―肉類だけでなく、ラーメンやペットボトルなどもあった―を提供した。この他、足りないものは家からもっていき、ローソクや灯油なども手配した。また、夜になると冷え込んできたため、若い人たちに神社の裏山から木を拾ってきてもらい、それを燃やして暖をとった。こうして、何とか2～3日しのいだ。3日目ごろから、支援物資が届き始めた。最初にきたのは赤十字からの毛布であった。このような支援物資の管理も松崎さんが行った。その際、松崎さんが心掛けたことは、支援を必要としている人にできる限り平等に物資を配分することであった。それは物資を、比古神社に避難している人だけでなく、自宅で暮らしている人にも必要であれば分配することを意味している。「自宅で暮らす人も、被災者である」というのが、松崎さんの基本的な考えであった。このため、支援物資が届くと、町内の人たちにもアナウンスをして回った。また、このころになると、避難者の安否確認や医療チームからの支援の申し入れなどもあり、そうしたことも松崎さんが窓口となって対応した。松崎さんは3日目以降、自宅で寝泊まりするようになり、朝になると神社に向かった。神社に着くとコーヒーを沸かした。このコーヒーを避難している人や神社にやってきた人と一緒に飲みながら、情報交換をした（平成27年3月14日聞き取り）。

写真4　比古神社社務所

その後、比古神社の避難所は、平成23（2011）年3月いっぱいで閉められ、4月1日からは藤原小学校に統合された。

(2) 藤原小学校にて

古舘善一さん・篤子さん夫婦（前出）は、地震発生直後に藤原小学校に避難し、17時前ごろ体育館の中に入った。床には何も敷かれておらず、直に座らざるを得なかった。この日は食べ物も水もなかった。夜遅くになって、第四分団が毛布をもってきてくれた。毛布は2人で1枚の割合で配られた。ストーブは1台しかなかったようで、とにかく寒かった。電気はつかなかったが、藤原上町の人々がローソクをもってきてくれた。この夜は、余震のたびに体育館が大きく揺れ、怖かった。「バスケットのゴールが落ちなければいいが」という思いで見つめていた。古舘さん夫婦は藤原小学校に1晩泊まっただけで、翌日からは和見にある息子夫婦の家で避難生活を送るようになった（平成27年4月25日聞き取り）。

古舘さんと入れ替わるようにして藤原小学校にやってきたのが、**飛澤寿男さん**（前出）である。飛澤さんが3月12日に藤原小学校に入ったときには、床に体育で使うマットが敷いてあったが、それでも寒かった。また、藤原上町の自治会長が炊き出しをしてくれたりしていた。体育館で2～3日過ごしたが、あまりにも寒いので、誰かがいい出して視聴覚室に移らせてもらった。この部屋は絨毯が敷いてあっただけでなく、適度な広さであったため、ストーブをたくとすぐに暖まった。

3月の段階では、藤原小学校の避難所の世話をする人がいなかったため、当時、自治会長を務めていた飛澤さんがその役を買って出た。飛澤さんによると、避難所生活でとにかく困ったのは風呂であった。そこで、「湯ったり館」に交渉して入浴させてもらった。飛澤さんが、藤原小学校の避難所で世話役を担っていたのは、4月上旬ごろまでであった。4月1日以降は、市役所から職員がきて、各避難所の管理を担当するようになった。4月以降、飛澤さんも避難所の世話係を市の職員に任せ、自身はこれまで手をつけることができなかった自宅の片付けに専念することにした（平成27年4月29日聞き取り）。

なお、参考までに、こうした藤原小学校での1日のタイムスケジュールを書きとどめておく。

6時00分　起床
6時30分　朝食
12時00分　昼食
18時00分　夕食
21時00分　消灯・就寝

以上のようにして運営されていた藤原小学校の避難所も、平成23年7月31日の17時をもって閉鎖された。

(3) 磯鶏小学校にて

地震発生直後、石崎から避難してきた**佐々木トシさん**（前出）は、17時ごろに磯鶏小学校に着き、すぐに体育館に入った。床には莫蓙が敷かれており、ストーブが3台くらい置かれていた。体育館に入ると、毛布が1人1枚与えられた。この毛布の枚数は、時間帯によって異なっていたようである。石崎に住む**藤澤キヨさん**（昭和23年生）は、磯鶏を散歩中に地震にあった。そこで一旦自宅に戻り、薬だけもって磯鶏小学校に避難した。すぐに帰れるものと思い体育館に入らずにいたが、やがて日も暮れてきたので中に入った。体育館に入った時間は、佐々木さんよりも遅かったようである。館内はすでに人でいっぱいであった。何とか空いているところを見つけ、夫と2人で座った。このとき配られた毛布は、2人で1枚であった。翌朝、避難所を出ていく人から1枚もらい、1人1枚使えるようになった。佐々木さんと藤澤さんによると、3月11日の夜は人であふれており、横になれず座ったまま過ごした。この日、磯鶏小学校に避難した人の中には、校庭に止めた車の中で過ごした人もいた。そうした人たちのために、磯鶏小学校の先生が教室を解放した。この人たちを含めると、初日の避難者は500名くらいではないかと、佐々木さんと藤澤さんはいう。2人は避難所で最初に座ったところから動くことはなく、退所するまでそこで過ごした。

地震のあった日の晩は、食パンが1枚出された。翌日の朝はパンの耳であった。次の日は、八木沢の婦人会からおにぎりの差し入れがあった。そのうち、新里からも差し入れが届いたりしたが、何もないこともあり、そのときは残ったご飯を集めてお粥にして一口ずつもらったこともあった。農家の人がもち寄った食材を給食室で調理し、それをもらったこともあった。支援物資が届き始めたのは、いつのことかわからないが、**前川秀子さん**（昭和25年生）が磯鶏小学校に避難してきた3日目には、食べるものには困らない状態であった。飲み水は学校の給水タンクにたまっていたものを使用した。トイレの水は、学校の裏に沢水をためる池があり、その池からバケツリレーでくみ出して使った。このため、磯鶏小学校では水にも困らなかった。さらに、他の避難所では、トイレが詰まって大変だったという話をしばしば耳にしたが、ここでも確かに何度か詰まったもののすぐに解消され、たいして問題にならなかった。風呂には、何日目かに連れて行ってもらった。「湯ったり館」や箱石の方に行ったこともある。また、磯鶏小学校では古い風呂をプールのそばに設置して、入れるようになっていた。この風呂は、磯鶏小学校の校長先生が、八木沢の建設業者に声をかけて作ってもらったものである。「磯鶏の湯」と呼ばれ、毎週月曜日と木曜日は男性の入浴日、火曜日と金曜日は女性の入浴日とされた。入浴時間は

17時から21時で、原則2人で入浴することとなっていた。入浴の際には予約が必要であった。風呂掃除は、体育館の掃除当番が担当した。磯鶏の湯は、避難所生活を送る人々に好評だったようである。

磯鶏小学校の避難所における1日のタイムスケジュールは、以下のようになっていた。

6時00分前　朝の掃除、ストーブ給油
7時30分　朝食
12時00分　昼食
17時30分ごろ　夕食
21時00分　就寝

このうち、毎朝行われていた掃除は近くに座った人たちで班を作り、順番で行った。また、ストーブへの給油は男性の仕事であった（平成27年9月11日聞き取り）。

磯鶏小学校の避難所は、当初からしっかりと運営されていたといわれている。その運営に中心的な役割を果たした人物は3人いた。それは、当時の磯鶏小学校の校長先生と市役所に勤務していた男性、そして磯鶏小学校で避難生活を送る人たちの手伝いをしようと駆けつけた**北村嘉勝さん**（昭和22年生）であった。北村さんは、宮古市教育委員会で相談支援員をしている。ここでは、彼の語りを通して、磯鶏小学校避難所の様子を明らかにしたい。

北村さんの自宅は上村にある。地震の被害はそれほどでもなかったが、津波は玄関先までできていた。このため、家にいた父親の手をひいて、家よりも高いところにある上村公園に避難した。このとき長靴を履いて水の中を歩いて行った。上村公園に着くと、町内会長がテントを張り薪を燃やして暖をとるというので手伝った。50人、あるいはもう少し多くの人が避難していたようである。その日は薪でご飯を炊いた。夜になると、父親が寒がるので自宅へ帰ることにした。余震も続いていたが、あれほど大きな揺れはもうないだろうと判断してのことであった。翌日は家の前のがれきの片付けをし、翌々日は妻の実家が鍬ヶ崎であったため、避難所を回って義理の母を探した。

北村さんが磯鶏小学校で被災者の支援を開始するのは、3月14日からであった。磯鶏小学校に行くと、避難所の切り盛りは校長先生がしていた。また、市役所勤務の男性もおり、この人が学校側と被災者とのパイプ役となっていた。北村さんは、これ以降、この男性とともに活動することになる。磯鶏小学校に避難した人々は、8つくらいの班に分けられていた。班ごとに長が決められ、校長先生が班長会議を招集した。そこでは学校側の要望などが話し合われた。当時、磯鶏小学校は避難してきた人々の生活の場となっていたが、学校としての役割をやめたわけではなかった。そのため、どこまでを避難所として使い、どこからは通常の学校として児童・職員が使うのかといったことが話し合われた。また、班長会議では、調理や掃除を当番制にすることも決められた。こうした制度や、上述した1日のタイムスケジュール、トイレ用の水のバケツリレーなども、震災から1週間もたたないうちに決まっていった。さらに、磯鶏小学校では、病院・金融機関などに関する情報や、各種申請手続きの仕方などが書かれた紙が張り出された。これは、市職員の男性が作ったものであった。

磯鶏小学校に避難してきた人は、最初に名前と居住地を書いてもらうことになっていた。その情報は、体育館の舞台の上に張り出された。この名簿を、後に北村さんが表計算ソフトに打ち込んだ。その際、転出する人の情報を備考欄に打ち込むようにした。こうすることで、外部から問い合わせがあった際に、すぐわかるようにしておいた。打ち込んだ人の数は581名におよんだ。北村さんはまた、届いた支援物資の整理・管理も担当した。よく使うものは前に置き、すぐに必要でないものは保管庫に入れ、要望があれば出した。支援物資の分け方については、前の晩からアナウンスをしておき、一斉に広げるようにした。このとき、「我先に」と取り合いにならないように注意した。なお、支援物資を分ける際には、避難所で暮らす人だけでなく自宅で暮らす人にもアナウンスをし、避難所に取りにきた人には渡すようにした。また、

支援にやってくる医療チームに関して、ときには注文をつけることもあった。彼らの来所は波状的であり、中には20時ごろに避難所を訪れるところもあった。こうしたチームには、避難している人を中心に考えてほしいと申し入れた。なお、各医療チームは、相互に情報の連携をはかっていなかったようである。そのため、避難者1人1人のカルテを作り、診察後に記入してもらうことにした。以上のような手伝いをする中で、北村さんは、避難している人との間で苦労したことはあまりなかったと話す。暮らしている人々の相性は見ていればわかるので、配慮したという。

北村さんはこうした活動を、磯鶏小学校に市の職員が配置され、複数いる担当職員が同校での業務を1回は経験するまでの間（具体的には4月11日まで）、ほぼ毎日続けたという。その間、自宅から通い続け、朝7時30分ごろに体育館にやってきて、消灯時間となる21時ごろ帰宅した。北村さんによると、避難所生活を円滑にするために重要なことは、「そこにいる人たちを中心に考えること」であるという。また、人々の善意の申し出を拒否せず、サービスとニーズを結びつけるようにすることも大切であると述べていた。それが、人々の自発的な活動を引き出すことにつながるからであろう。このようなコーディネートは、地域の人がやった方がいいかもしれないとも話していた。きわめて示唆に富む指摘である。こうしたことは、地域の実情を知っているからこそできる支援なのかもしれない（平成27年9月13日聞き取り）。

(4) 自宅に戻った人々

3月11日の震災後、水が引いてから比較的早い時期に、ほとんどの人が一度自宅の状況を確認しに行っている。藤原・磯鶏地区の場合、1階は水に浸かったものの、2階以上は無事であった家屋が多くある。その場合、ライフラインが復活していない不便な状態であるにもかかわらず、避難所での生活を早々に切り上げ、自宅で暮らすことを選択した人々もいた。

伊藤鐵男さん（昭和18年生）の家も、2階は辛くも被害を免れた。そのため、震災5日目に、避難先であった岩手県立宮古商業高校から自宅に戻った。このとき電気・ガス・水道はすべて止まっていた。それでも自宅に戻ったのは、避難所生活の気疲れと、商業高校のトイレが使えなかったことにあった。伊藤さんの自宅はがれきと泥で汚れていたが、トイレと風呂はあまり汚れていなかった。しかも、風呂には水が張ってあったため、この水を使ってトイレを流せば問題なく使用できる状態であった。しかし、自宅で生活するとなると、水と食料を確保する必要がある。水は、現在、宮古市立高浜小学校の近くの高台移転用地となっているあたりで沢水をくんだ。食料は親戚がもってきてくれた。伊藤さんは、親戚が多いことはありがたいと強調していた。調理には、知人からもらった薪ストーブを利用した。薪にはがれきを使った。伊藤さんは、このような生活を続けながら、家の片付けを始めた。がれきや泥を取り除き、必要なところは自分で修理をした。自分の住まいなので、自分たちさえ我慢できればそれでいいと思い、掃除から修繕まですべて自分でやった。そうした技術ならびに覚悟があったからこそ、早期帰宅が実現したのであろう（平成27年3月12日聞き取り）。

3 「日常」へ向けて

藤原・磯鶏地区に大きな被害をもたらした今回の東日本大震災。ここで紹介した人々も、それぞれ大変な思いをしていたことが見て取れよう。しかし、いつまでも被災者のままでいるわけにもいかない。しばらくすると、住民たちは「以前の暮らし」を少しでも取り戻そうと立ち上がり始めた。ここではそうした7名の話を書きとめておく。

石川浩さん（昭和20年生）の場合

石崎で飲食店を営む石川さんは、店舗が防潮堤のすぐそばにあり、店の1階部分に大きな被害を受けた。その状況を目の当たりにして、一時、商売をやめようと思ったこともあったという。それでも石川さんは、震災から1か月半ほどたった4月の終わりごろから弁当作りを

始めた。店の外階段の下にある水道だけ、奇跡的に水が出た。この水道にホースをつないで厨房に引き込み、調理をした。このときはまだ電気がきていなかったため、冷蔵庫が使えなかった。食材の保存ができず、仕入れはその日のうちに使いきれる分だけであった。作った弁当は、最初、グリーンピア田老の仮設住宅の建設現場に10個ほどもっていった。ここにはもともと別の業者が弁当を納めていたが、その弁当はおそらく前日に作ったものであった。一方、石川さんの弁当は、冷蔵庫が使えなかった関係で、その日に作ったものである。それがよかったのか、そのうちいろいろな人から声がかかり、４００～５００個の注文が入るようになった。やがて、どこから聞きつけたのか、おそらく郡山の会社だと思われるが、仮設住宅を建てる企業の関係者から電話があり、弁当を納入するようになった。それによって、このあたりのほとんどの仮設住宅の建設現場に弁当を運ぶこととなり、さらには釜石にまで運ぶようになった。また、パークホテルに避難していた人たちが仮設住宅に移った後、そこに全国から応援に駆けつけた警察官が入った。この人たちにも弁当を配ってくれといわれ、朝・昼・晩とパークホテルに、さらには彼らの勤務先となった宮古警察署、釜石警察署にも配達に行った。こうして頻繁に釜石まで行くようになったことで、同地で仮設住宅を建設していた大手の建設会社からも注文が入った。しかも、この会社からは、弁当に飲み物をつけてほしいといわれた。そうなると店の車に詰め切れないので、レンタカーを借りて納入した。結局、弁当の配達先は、釜石をはじめ大槌、山田、鵜住居などにもおよんだ。

こうした弁当作りを本格的に行うようになったのは、６月の初めごろだった。電気がきて、冷蔵庫が使えるようになってからのことである。それから仮設住宅の建設が終了するまでの約１年間は、弁当作りをしていた。また、平成23年５月の初めごろにホテル近江屋社長の近江勇さんがきて、補助金が出るので一緒に申請しないかと誘われ、申請することにした。この補助金とは、いわゆる「グループ補助金」、正式名称「中小企業等グループによる施設・設備復旧整備補助事業」である。申請は第３次の募集で通り、補助金を得て店を再開することができた。この制度では、中小企業の場合、国からの補助が２分の１、県から４分の１出ることになっていた。したがって、自己負担は４分の１ですむため、申請者からするとメリットの大きな事業であった。だからこそ近江さんや石川さんも応募したのだが、ここに落とし穴があった。先に述べたように、彼らの申請が通ったのは第３次の募集であった。しかし、彼らは第１次の募集から応募を続けていた。そうしたこともあって、第３次募集の際の申請書類は、工事の見積書を含め、第１次のときに作成したものを援用していた。だが、第１次から第３次までのわずかな期間でも、建築資材の値段は上がっていた。また、補助金を得てから実際の工事がすべて終了するまでの間にも、資材の値段は上がり続けた。このため、実際の工事費用は見積額を大きく上回ってしまい、かなりの額をもち出さざるを得なくなった。このような話を、石川さんは笑いながらしてくれた。現在、石崎にある石川さんの店は、「お食事処　五右衛門」として営業を続けている。震災後、この店は以上のような経緯で開店し、私たちに食事を提供してくれている（平成27年４月26日聞き取り）。

近江勇さん（前出）の場合

次に、石川さんらを誘い、グループ補助金の申請・獲得に尽力した近江勇さんが代表取締役社長を務める、ホテル近江屋の再オープンまでの軌跡を紹介したい。３月11日の津波によって、ホテル近江屋は一部分２階まで水に浸かった。しかも、１階には貯木場にあった材木が流れ込み、壁さえない状態であった。このため、まずは２階から手をつけ、浸水した部屋を直した。それによって、平成23年６月１日より「仮営業」というかたちで、２階以上での営業を再開した。このころになると食材も手に入ったので、２階にあった和風レストランの厨房を使って宿泊客に食事を提供した。しかし、厨房にあった機械類はすべて流されてしまったため、手の込んだものはできなかった。また、食器類も残ったものを使わざるを得なかった。

仮営業開始当初は、仮設住宅の建設を担った人々が泊まった。かなりの人数であったため部屋数が足りず、宴会場で寝泊まりした人もいた。また、ホテル近江屋の大浴場は1階にあったため、このころはまだ1階が使用できず、客室のバスを使ってもらった。その際、水の心配があったことから、シャワーのみにしてほしいとお願いした。こうして事業を再開したホテル近江屋であったが、当時は資金がなく、被害の大きかった1階の修繕は難しかった。そうした状況を好転させてくれたのが、グループ補助金である。これによって、ようやく1階部分に手をつけることができ、平成25（２０１３）年４月に本格的に営業を再開することができた。

このように見てくると、グループ補助金の意義は、きわめて大きいといえる。しかし、ホテル近江屋の場合も石川さん同様、建築資材の高騰から見積額と実際の工事費用との差額が大きくなってしまい、本来であれば自己負担は４分の１ですむはずであったが、ふたを開けてみると、半分くらいは自分たちで負担しなければならなくなってしまったという（平成27年３月13日聞き取り）。

菅田正義さん（昭和33年生）の場合

そうした問題点を内包するグループ補助金であるが、それでもやはり事業主からすれば魅力的なのであろう。石川さんや近江さんの他にも、この補助金を用いて事業を軌道に乗せようと努力を続ける人がいる。「元祖すがたのいかせんべい」で有名な有限会社すがたの代表取締役、菅田正義さんもその１人である。菅田さんは、地震発生当時、藤原にあった自宅兼工場にいた。地震直後、２階にいた娘があまりにも怖がるので、そのとき自宅にいた妻と三男もつれて、全員で黒田町にある住宅兼店舗に車で向かった。黒田町の店舗にはもともと菅田さんの両親が住んでいたが、地震直後に避難していた。家族を黒田町で降ろし、菅田さんは再度藤原に戻ろうと車を走らせた。市役所のあたりまできたとき、真っ黒な津波が押し寄せてきた。あわてて黒田町の店舗に引き返し、家族を車に乗せ、少しでも高いところへ行った方がよいと思い、山口３丁目のコミュニティに避難した。黒田町の店舗も津波の被害を受けたため、菅田さん一家は、それからしばらく避難所で生活するようになる。

震災後は何もする気が起きなったため、黒田町の店舗の片付けも藤原の工場の片付けも手をつけられなかった。藤原の工場を見に行ったのは、地震から２～３週間ほどたってからである。このときの工場の様子はすさまじかった。一面泥だらけであり、また貯木場から流れ出した材木が刺さっていた。片付けは、あまりのひどさにどこから手をつけたらよいかわからず、まったくはかどらなかった。そうした中、たまたま盛岡の知人が見舞いにきてくれた。彼は、「こういうときは難しく考えず、まずはできることから始めればいい」とアドバイスをしてくれ、一緒に片付けを手伝ってくれた。また、高圧洗浄機や発電機、食料、ガソリンなどといった必要なものも送ってくれた。こうしてようやく片付けにも身が入り、事業再開への糸口となった。工場にあった機械も自分たちで分解し、磨き直し、整備した。

事業再開のきっかけは、他にもいくつかある。例えば、避難生活を送る中で、娘がいつももち歩いていた重そうなリュックの中身を見たのも、その１つである。大学受験を迎える娘のリュックの中には、参考書類が詰まっていた。これを見たとき、「娘は生きようとしている、何とかしなければ」と思ったという。また、がれきの片付けをしていた最中に、先祖が使っていたいかせんべいの型が出てきたのも大きかった。創業者が使っていた大正時代の型や（写真５）、戦時中に使っていた型である。これを発見したとき、先祖から「事業を続けろ」といわれているように思い、「それならばやってみよう」という気になった。いかせんべいは、この型と材料さえあれば、あとは家庭にあるもので作ることができる。材料は、仕入れ先が津波の被害を受けていないところにあったので、問題なく手に入った。これを家庭用の鍋で煮て型に流し込むと、いかせんべいとなる。調理用の火は、小さめのガスバーナーを磨き直して、プロパンガスとつなぐことで確保した。厄介であったのは、材料の配合表が津波で流されてしまったことであった。その

ため、記憶にあった配合率をもとにせんべいを試作し、それを食べて微調整をするというプロセスを繰り返して、店の味に近づけていった。こうしてせんべいを焼いているうちに、工場の機械の整備も終わり、平成23（２０１１）年５月13日に、本格的に事業を再開するに至ったのである。

その後、菅田さんはグループ補助金を得て、工場を花輪に移す。花輪の工場は平成25年２月に完成し、３月から稼働した。震災から４年が過ぎた平成27年４月の時点で、事業はようやく震災前の９割ほどまで回復してきた。しかし、まだまだ落ち着きが戻っていない。特に最近では人手不足に悩まされている。震災後、２年目くらいまでは、従業員を募集すると多数の応募があったが、このころは設備が整っておらず雇うことができなかった。近年、ようやく設備が整い始めたが、今度は逆に人が集まらない。思い通りにいかないものだと、笑っていた（平成27年４月30日聞き取り）。

以上、有限会社すがたが、事業を再開するまでの様子を見てきた。菅田さんの話からすると、事業再開の契機となったものは２つある。一つは、盛岡の知人の援助や娘の未来を生きようとする姿であり、もう一つは会社の原点ともいうべきモノ、すなわちいかせんべいの型が出てきたことであった。菅田さん同様、人もしくはモノが事業再開の契機となったと語る人は他にもいる。化粧品店を経営する小野寺俊雄さんや、遊漁船業を営む澤口則夫さんも、人がきっかけとなって事業を再開している。そこで、次に２人の話を紹介したい。

写真５　大正時代のいかせんべいの型

小野寺俊雄さん（前出）の場合

藤原にある小野寺さんの自宅兼店舗は、１・５メートルほど水に浸かった。ショーケースもすべてひっくり返され、泥もひどかった。家族は、地震発生直後に崎山の親戚のところに避難させたため、家には消防団員として残った小野寺さんしかいなかった。このため、自宅と店舗の片付けは、基本的に小野寺さん１人で行わざるを得なかった。片付けはまるではかどらず、むなしくなった。立ち直れないのではないかと思ったという。そうしたところに、東京から化粧品メーカーの人がきてくれて、一緒に泥をかきだしてくれた。また、崎山にいた弟や大阪の弟もやってきて、朝から晩まで片付けを手伝ってくれた。特に、大阪の弟は「腰を痛めているのではないか」という気遣いから、コルセットを持参してくれた。こうした思いがとても嬉しかった。このように、様々な人たちが手を貸してくれたので、ここでやめるわけにはいかないと思い直した。そこで、とにかく店を開けてしまえば「頑張るしかない」と思うようになるだろうと考え、平成23年６月から商売を再開したのであった（平成27年３月14日聞き取り）。

澤口則夫さん（前出）の場合

澤口さんの自宅は磯鶏にある。上述の通り、自宅の１階部分には貯木場の丸太が30本くらい流れ込み、家に穴が開いた状態であった。また、自宅のそばに貸家をもっていたが、そこにも津波によって流されてきたバスがぶつかり、建物ごと押し流されてしまっていた。澤口さんは震災前、４艘の船を所有していた。このうちの１艘は、沖に逃げる際に乗っていったため無事であった。もう１艘は、浜に打ち上げられてひっくり返っていたが、エンジンを取り換えれば使える状態であった。残り２艘のうちの１艘は完全に沈没してしまい、最後の１艘は赤前方面に流され、陸に乗り上げてしまい使用できなくなっていた。このように、今回の津波によって澤口さんがこうむった被害は、かなり大き

かった。

澤口さんが、震災後、初めて釣り船を出したのは平成23年4月16日であった。知り合いの客が、顔を見がてら釣りに出ようといってくれたのがきっかけであった。このとき、澤口さんは、港も整備されていないので行きたくないと思っていた。しかし、客が行こうというので船を出した。すると見事に魚が釣れた。そのときの様子をウェブサイトに掲載したところ、徐々に客が戻ってきた。ゴールデンウィークには、例年のように釣り船を出すことができた。その後、澤口さんは、補助金を受けずに自己資金だけで中古の船を購入した。また、自宅と貸家の建て直しも行った。ここからは、震災による大きな損害を嘆くのではなく、未来を切り開こうとする澤口さんの強い意志を感じ取ることができるように思われる（平成27年4月28日聞き取り）。

中居信夫さん（前出）の場合

このように、小野寺さんと澤口則夫さんの場合、人との交流が事業再開を後押しした。他方、モノが事業再開の契機になったケースとして、中居信夫さんの例をあげることができる。漁師の中居さんは、震災によって家を流されただけでなく、所有していた2艘の漁船も、また魚探などの機材も失った。そのため、震災直後は再起できないだろうという気持ちが強かった。そうした中、知り合いの建設業者が水門のそばのがれきの中から小さい方の船（16尺の船）を引き出してくれた。一見、問題なさそうであったが、よく見ると船体にひびが入っていた。そこで「ホーマック（磯鶏にあるホームセンター）」で発電機を買い、自分で修理した。修理代は、発電機代を別にした材料費だけで、5万円くらいであった。その後、エンジンも買った。船を修理しているうちに、だんだん気持ちも前向きになってきて、「もう一度やってみるか」と思えるようになってきた。中居さんは、津波によって家を失ったため、震災後は兄の下で暮らしていた。船の修理は、兄の家から通いながら進め、すべての修理が終わったのは藤原の仮設住宅に入った7月末以降のことであった。その間に少しずつ漁具などもそろえ、平成24（2012）年1月ごろから漁に出るようになった。今ではアワビ漁もするし、イカ釣りもしている。

また、復興船も入手した。平成24年の8～9月くらいに、18尺の船（中古船）がきた。復興船として国が支援してくれるのは船体とエンジンだけで、その他の機材・漁具は自分で買いそろえなければならない。アワビ漁用の漁具をそろえると15～20万円ほどかかる。平成24年11月に、震災後初めてアワビ漁をした。竿は購入したが、水メガネは自分で作った。このときのアワビの量は少なめだった。

以上のように、中居さんは、自分の手で船の修理を進めていく中で気持ちが変わっていったと述べている。モノとのかかわりが再起を促したといえよう（平成27年9月12日聞き取り）。

伊藤鐵男さん（前出）の場合

事業再開に関する話の最後に、中居さんと同じように漁師をしている伊藤鐵男さんのことを記しておきたい。伊藤さんは、カキ、昆布、わかめなどを獲っていたが、震災ですべてを失った。当然、カキも全滅した。伊藤さんは、カキの養殖に並々ならぬ思いをもっている。宮古のカキの養殖は伊藤さんの父親が昭和6（1931）年に初めて行ったからである。そのため、震災後しばらくして、カキの養殖を再開した。カキは育つのに約2年かかる。震災後につけたカキは、収穫可能となった時期に台風がきてしまい、その影響で8～9割が落ちてしまった。このため残念ながら、その年は収穫することができなかった。その後、再度カキを植えつけ、ようやく平成26（2014）年12月に震災後初めて収穫できた。

カキの養殖に関連して、伊藤さんは興味深いことを語ってくれた。震災後、カキの貝の成長が早くなったという。地震や津波の影響で漁師をやめた人もいたため、同業者が少なくなったことが関係しているのだろうかと首をかしげた。ただ、貝の成長は早くなったものの、カキの身の入りが遅くなったとも指摘していた。山からの水が少ないために、海の栄養が足りないのかもしれないという。近頃は、海の水が

しょっぱいどころか、にがく感じるともいっていた。長らく海とともに生きてきた伊藤さんだからこその言葉である（平成27年3月12日聞き取り）。

まとめにかえて

以上、藤原・磯鶏地区の人々の被災体験について報告してきた。見てきたように、住民たちの経験はそれぞれ異なっていた。こうした経験は、教訓として今後に生かされるべきであると考える。似たような規模の、もしかしたらそれ以上の災害が、近い将来、別の地域で起きる可能性が高いからである。その意味で、藤原・磯鶏地区の人々の語りは、永遠に記録と記憶にとどめる必要があるはずである。

付　記

調査にご協力いただきました澤口功さんは平成28年2月にお亡くなりになりました。心からご冥福をお祈りいたします。

【参考文献】

宮古市東日本大震災記録編集委員会（編）２０１４『東日本大震災　宮古市の記録』第1巻（津波史編）宮古市